

鳥取大学研究成果リポジトリ

Tottori University research result repository

タイトル Title	「一式飾り」探訪記：第10回 「ワタノハスマイル」の奇跡
著者 Author(s)	Takahashi, Kenji
掲載誌・巻号・ページ Citation	島根日日新聞：5 - 5
刊行日 Issue Date	2018-06-06
資源タイプ Resource Type	論文 / Article
版区分 Resource Version	出版社版 / Publisher
権利 Rights	注があるものを除き、この著作物は日本国著作権法により保護されています。 / This work is protected under Japanese Copyright Law unless otherwise noted.
DOI	
URL	http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/6237

「一式飾り」探訪記

鳥取大学地域学部准教授 高橋 健司

第10回

れ、2016年7月には鳥取市のわらべ館でも展示された。写真はその時のものである。

わった姿に感動を覚えた。それと同時に、ガレキとなった道具を見立てた作品が、私の目には「一式飾り」と重なって見えた。

江戸時代にルーツを持つ「一式飾り」は、かつては全国各地で見られたが、時代の移り変わりと共に衰退し、今では山陰や北陸など限られた地域でしか見られない。そんな状況の中で、なぜ被災地で「一式飾り」同様の作品が生まれ、大きな反響を呼ぶのだろうか。

その理由を知ろうと、渡波小学校で子どもたちを支援した造形作家の犬飼とも氏に、お話を伺った。犬飼氏は避難所で暮らす子どもたちがガレキの山で遊ぶ姿を見て、ガレキを用いた作品作りを提案した。すると、この遊びに子どもたちが熱中し、あっといふ間に多くの作品ができ上がったのである。

子どもたちは遊び道具もない不慣れた状況に置かれたことで、ガレキの「見立て」の面白さに目覚めたのではないだろうか。津波は多くの物を奪い去ったが、子どもたちに想像力を発揮する機会を与えた。その豊かな発想に、多くの人が共感するのだと思いつつ、わらべ館では展示と併せて犬飼氏のワークショップが開催され、鳥取の子どもたちに混じって私も参加させてもらった。机の上に並べられたさまざまな形の道具を使って、即興で作品を作った。子どもたちは「一式飾り」の制作と同様、短時間でユニークな作品を次々と生み出した。私も一緒に「見立て遊び」を堪能することができた。

前回に続き、今回も子どもの作品を紹介したい。写真をご覧いただきたい。たくさん笑顔の作品が並んでいる。郵便ポストや電気スタンドの顔があるかと思えば、三角コーンの帽子を被り、蛇口の鼻を付けた顔もある。右端に見えるのは、漁具の浮きを二重にした顔もあるか。これらはすべて漂着物一式で作られている。漂着物と言っても浜辺で拾ったものではない。2011年3月11日に起きた東日本大震災の津波が、小学校の校庭に運んだガレキである。

ガレキから作品が生まれた場所は、宮城県の石巻市立渡波（わたのは）小学校。渡波小学校は震災後に避難所となり、そこで避難生活を送る子どもたちが作品を作った。

「ワタノハスマイル」の奇跡



子どもたちの作品は、後「マイル」は奇跡と言われる通に「ワタノハスマイル」と名付けられて全国各地で展示された。笑顔あふれる作品に生まれ変わった。

「ワタノハスマイル」は海外でも評判となり、イタリアの美術館で展示された。作品を作った被災地の子どもたちと犬飼氏が招待され、ワークショップも開催された。ここでは日本とイタリアの子どもが共に道具を見立て、仲良く遊ぶ姿が見られたのである。

こうして国や地域を超えて「見立て遊び」の輪が広がっていくことが、私には奇跡のように思えてならない。